

ラオス北部地域における甲状腺疾患の地域分布

Regional Distribution of Thyroid Diseases in Northern Laos

○高柳玲香¹, 岸田侑子¹

Reika Takayanagi, Yuko Kishida

1 (認定)特定非営利活動法人ジャパンハート ラオスオフィス

1 NPO International Medical Volunteers Japan Heart, Laos Office

【背景と目的】

ラオスは東南アジア唯一の内陸国であり、ヨード欠乏地域が多い。ラオス政府は対策として、精製されたすべての塩にヨードを添加することを法律で義務付けている。ヨードを含有している塩を使用している家庭は全国で、76.6%と報告されているが地方、特に農村部では国勢調査と住民登録の不備があり、正確であるとは言えない (UNICEF, 2017)。ヨード欠乏は、甲状腺腫や甲状腺機能低下症を引き起こす要因となる。内陸国であるラオスはこれらの疾患を抱える患者が多いことが予測されるが、これまで甲状腺疾患の患者数調査は行われてこなかった。また、先行研究はほとんどなく、ラオス政府が公開している情報も少ない。

弊団体では2016年6月より OudomXay 県病院とラオス北部甲状腺治療技術移転プロジェクトを開始し、現在では1000人を超える患者が来院している。筆者らは診療活動を行うなかで、甲状腺機能低下症の患者は少なく、ヨード欠乏は改善されている可能性があると考えた。そのため、プロジェクトで来院している患者の実態を明らかにすることとした。

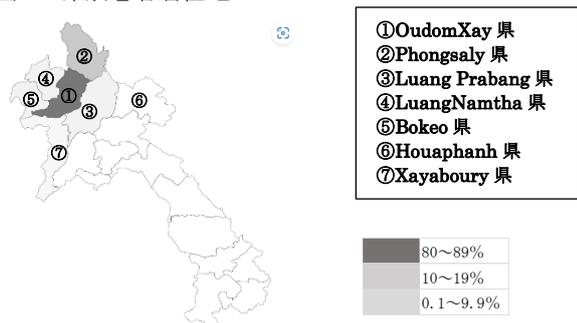
【方法】

2016年から2024年までに来院した北部地域に居住している1000名の患者カルテより、初診時にTSH値を計測し甲状腺疾患と診断された患者を対象とし、年度別にデータを収集した。年齢、性別、初診時の診断、TSH値、妊娠・出産経験の有無、居住地を収集し、①居住地別の患者数と疾患の分類 (甲状腺機能が正常である甲状腺腫瘍、顕性甲状腺中毒症、顕性甲状腺機能低下症、潜在性甲状腺中毒症、潜在性甲状腺機能低下症) ②男女比③年齢④妊娠・出産経験がある顕性甲状腺中毒症の女性患者の分類を行った。TRAb、TSAAb、抗TPO抗体の検査設備がなく、上記の分類とした。また、④については複数回のカルテ改訂があり、2023年以降の情報が抽出できなかったため、対象を2016年から2022年の期間とし、来院した年度別で分け、経年変化について考察を行った。

活動病院より患者カルテ利用の合意を得ている。また、本演題に関連して開示すべき利益相反関係にある企業等はない。

【結果】

図1. 県別患者居住地



1000名の患者のうち874名が対象となり、OudomXay 県 82.5%、Phongsaly 県 12.6%、Luang Prabang 県 2.2%、LuangNamtha 県 1.5%、Bokeo 県 0.7%、Houaphanh 県 0.3%、Xayaboury 県 0.2%であった。年度別に分類した居住県による受診者率はすべての年度で同様の傾向にあった。甲状腺機能が正常である甲状腺腫瘍患者は 34.3%、顕性甲状腺中毒症は 44.4%、顕性甲状腺機能低下症は 6.4%、潜在性甲状腺中毒症は 12.2%、潜在性甲状腺機能低下症は 2.3%であった。2019年～2022年、2024年は顕性甲状腺中毒症が最も多く、顕性甲状腺機能低下症、潜在性甲状腺機能低下症は少なかった。居住地別に分類も行ったが、概ね同様の結果となった。877名のうち、女性は808名、男性は69名であり、すべての県で89%以上が女性であった。生年月日が不明の患者が対象患者の20.5%おり、年齢の抽出が困難であった。参考程度であるが、30代、50代、40代の順で多かった。④で対象とした女性患者508名のうち、53.7%にあたる273名が潜在性甲状腺中毒症も含む顕性甲状腺中毒症と診断され、273名のうち63.7%にあたる174名に出産経験があった。

【考察】

顕性甲状腺機能低下症、潜在性甲状腺機能低下症の患者は少なく、2004年より塩にヨードの含有を義務づけたことが影響している可能性があるが、確証は難しく本研究の限界である。理由としてヨードは高温多湿の環境で、失われやすいとされている (中澤, 2010)。北部は亜熱帯地域であり、最高気温は40度、最低気温は0度と幅広く、ヨウ素の含有量が維持されているかは定かではない (UNDRR, 2013)。さらに、活動病院では医療資源が限られ確定診断に必須な検査が行えず、検査機器が古く結果が正確でないことも多い。超音波検査を実施していない診察もあり、甲状腺腫においても評価が難しい。以上から、ヨード含有を義務づけたことがヨード欠乏の改善に寄与しているかについては更なる調査が必要である。

バセドウ病や慢性甲状腺炎は妊娠可能年齢に好発し、出産経験のあるバセドウ病患者の40%が、産後1年以内にバセドウ病を発症している (網野, 1997)。これらのことから、出産経験が甲状腺機能亢進症発症のリスク因子となっていることは否定できない。

【文献】

- 網野信行, 多田 尚人, 日高 洋. (1997). 甲状腺疾患: 診断と治療の進歩. 日本内科学会雑誌, 第86巻(7), 1167-1174.
- 中澤裕美子, 前川貴伸, 阪井裕一. (2010). ラオス人民民主主義共和国首都部の妊婦におけるヨード欠乏症と今後の展望. 成長科学協会研究年報, 33, 213-9.
- Lao Statistics Bureau and UNICEF Lao PDR. (2017). Lao Social Indicator Survey II. 237.
- UNISDR, NHMS, WMO. (2013). COUNTRY ASSESSMENT REPORT FOR LAO PDR Strengthening of Hydrometeorological Services in Southeast Asia. 14.